

私の出会った

米川千嘉子

歌人

米川千嘉子よねかわちかこは信頼できる歌人である。歌も

文章も人柄も、すべてにわたってそう思う。

それは私だけの気持ちではないだろう。彼女に接する人は皆そう感じるのではないか。

かと言って米川さんは、堅苦しい優等生ではない。むしろ、アナキーな精神の自由さを、選ばれた言葉の端々に匂わせる人であるというのが、話している時の印象だ。何か相談があつて米川さんに電話すると、低めの落ち着いた声でゆったりとした間を置いて答えが返ってくる。内容の如何にかかわらず、いつも私には思いもよらなかつた奥行きのある意見で、ふーむそんなふうにも考えられるのかと驚き、勇気づけられるのである。

初めて米川千嘉子の名を知ったのは、彼女が角川短歌賞を受賞した時だった。「夏樫の素描」五十首である。まだ自分では短歌を始め



米川千嘉子

水原紫苑

ていなかつた私はこれを読んで衝撃を受けた。

「やはらかく二十代批判されながら目には見ゆあやめをひたのぼる水」などの詩的感受性は、私には全く無いものだったし、思索の深さも同じ年の生まれなのにはるかな感じがした。

それから数年経って、若手歌人の勉強会で米川さん本人に会つた。端正な美しさは歌の印象通りだったが、心に垣根を設けない、話しやすい人だった。べたべたした感傷を含まないやさしさと、聡明さが快かつた。

夫の坂井修一さんとも同じ会で会つた。米川さんと坂井さんの恋には伝説があつて、十九里浜の波打ち際に、坂井さんが土下座をして米川さんに求愛したと、誰かがまことしやかに教えてくれた。それは嘘にしても、坂井さんの米川さんへの愛と尊敬の示し方は、

傍らで見ている羨しい限りである。

加藤治郎さん、穂村弘さんと一緒に、米川さんたちのお家を訪ねたことがある。一粒種の慧くんが三歳ぐらいの時だった。次から次に米川さんのおいしい手料理が出され、私たちは大満足だったが、宴も終わり近くなつて、坂井さんが、「これはなかなかのものだからぜひ味わって下さい」と力をこめて言い、純白のおふるぶるしたブラマンジェが出た。一口食べるとなるほど後を引くおいしきでみんながおかわりをした。坂井さんはうれしくてたまらないという表情でなおも何か言おうとするのを、米川さんが美しく微笑みながらたしなめていたのである。

米川さんの師である馬場あき子さんが、いつか「チカ（米川さん）はいい女だよ」とおっしゃっていたことが思い出される。短歌に限らず、ものを書く女が、女としても人間としてもまっとうな成熟を遂げるのは、実にむずかしいことだと思いが、米川さんはそれを果たせそうなお一人である。共に年を重ねつつ、軌跡を見守ってゆきたい大切な歌人なのだ。

（みずはら・しおん「中部短歌」所属・「NHK歌壇」番組進行役）